



TITLE:

竇建徳集團と河北：隋唐帝國の性格をめぐって

AUTHOR(S):

氣賀澤, 保規

CITATION:

氣賀澤, 保規. 竇建徳集團と河北：隋唐帝國の性格をめぐって. 東洋史研究 1973, 31(4): 453-480

ISSUE DATE:

1973-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/152875>

RIGHT:

東洋史研究

第三十一卷第四號 昭和四十八年三月 發行

竇建德集團と河北

——隋唐帝國の性格をめぐって——

氣賀澤保規

目次

はじめに

一 隋末唐初の群雄諸集團

二 竇建德集團の成立

三 竇建德集團の構造

四 竇建德集團と士人層

おわりに

はじめに

關中の一隅から出發した西魏—北周政權は、五七六年に北齊を滅ぼして華北再統一に成功した。さらに宮廷革命で北周の實權を奪取した隋の文帝によって、開皇九（五九）年に陳の平定をみるに至り、數世紀にわたる分裂狀態はここにおいて終止符を打たれた。この西魏—北周より隋に至る急速な勢力伸張の過程に積極的に關與し内側において支えたのは、胡漢

體制の中から生み出された「關隴集團」と總稱される官僚群であった。しかし、この集團によって一地方政權から全國征覇へと進められた運動は、統一を果したのちも止まることを知らず、遂には煬帝の厭きなき奢侈・外征・土木工事等々の追求から引き起こされた隋末の反亂のまえに、その運動は頓挫せざるを得なかった。隋朝の滅亡は、北周以來の直線的廣がり伸び切った結果として、自らの維持能力の限界を突破したところからもたらされたのである。とするならば、權力内部からの掣肘力も機能せず、ひたすら膨脹し続ける隋朝統治集團に對して、外部より制御し破滅を餘儀なくさせる役割を擔った隋末諸反亂とは、どのような内實を備えていたのかという問題に想到せざるを得ない。

隋末唐初の段階で各地に勃發した諸反亂は、それらの活動の範圍と激烈さの程度において、後漢末の黃巾の亂をも凌駕するものであり、大小二百を越える集團の出現をみたといわれる。⁽¹⁾ この問題についての評價は、第一義的には、隋朝を滅亡に追込むとともに、以後三百年にわたって存續する唐帝國の成立を促した、という點に求められる。事實、從來の研究において、隋の崩壊と唐の成立とを視野の内に置いた考察がなされ、隋から唐への推移も「關隴集團」を基軸として本質的差異は認められないと把握し、反亂それ自體のもつ獨自の意義が深く問われないできたといつてよい。布目潮瀧氏は著書『隋唐史研究』で基本的には陳寅恪氏の說に依據し、「唐朝政權の形成と性質の近い隋末の叛亂は何かという立場」から、楊玄感・李密・李淵と進展する過程およびその内實を明確にされた。中國で文革の直前までに問題となったのは、隋・唐初の統治集團を、舊世族地主（貴族）と新興庶族地主との兩側面から追求することであった。⁽²⁾ しかし、そこで「隋末農民起義」に對して加えられた評價も、唐朝に「讓步政策」を迫り「貞觀の治」の開花を促した、とする範圍に止まっている。

また他方で、反亂それ自身の行動形態の中に意義を見出そうとする研究も續けられてきた。しかし、それらは、餘りにも「人民性」或はその裏返しとして現われる「群盜性」の面に目を奪われてしまつていたように思われる。すなわち、後者の面からは、亂を避けた貴族・豪族層をして唐朝擁立へと傾斜させた、⁽³⁾ という否定的見解しか用意できないのである。

漆俠氏は、煬帝の暴政によって誘發された當初の農民起義が、「反隋」「反封建」の共通の基盤に立つて次第に組織化を進め、遂には高句麗遠征を失敗に歸せしめ、隋朝滅亡にまで押上げたとして、それ自身のもつ人民性を高く評價しながらも、新たな地平に立ったこれらの戦線が、次の段階では自らの打倒の對象であつた「封建政權」そのものを逆に再構築する存在へと轉化し、そこに參加する農民を新王朝成立のための單なる「工具」として利用していく、という理解で終つてゐる。⁽⁴⁾ 横田滋氏も同様の觀點から、「農民の階級的意識の低さ・奴隸的卑屈さと相俟つて、李淵集團に代表される反動勢力に農民闘争の成果をさらにとらせる結果になつた」と斷定し、統治のあり方の問題へと視點がすり變えられてしまつた。

隋末唐初の激動する時代狀況に關する從來の研究は、終極的には唐朝の成立という事實を以て集約され、論理の十分な深化をみないまま平板な敘述で終つてきたように思われる。だが隋末の諸反亂は、「天下の人十分の九を擧げて盜賊と爲る」⁽⁵⁾ほどの廣汎な民衆と地域を卷込んで展開されたのであり、そこから次第に大組織へと收斂される中で、種々多様な行動形態をみせたのではないであらうか。隋朝の動搖を利用して隸屬狀態からの脱出をめざす蜂起を生み出しているように、反亂集團の強大化を強く促す下からの意志が、そこに色濃く投影されていることは無視できない。このことは、谷川道雄氏が提示された、北魏末の内亂を契機として開始される「あらたな自由の形式を創り出していく」潮流⁽⁶⁾の延長上に位置づけられるように思われる。さらに一步進めて論ずるならば、ほぼ全地域とあらゆる階層を呑込んだ反亂こそが、唐政權の内實を豊かにし統一帝國としての三百年にわたる存續を可能ならしめたのではないだろうか。

農民を主體に燃え上つた群小反亂集團は、隋朝崩壞直前の段階で、李密の領導する瓦崗軍を中堅に竇建德・杜伏威の各集團を兩翼とする一大反隋戦線を形成した。⁽⁷⁾それが、次の唐朝成立後の武德四（六三三）年に至り、關中に據る李淵、洛陽の王世充、それに河北から山東一帯を支配する竇建德と、三者鼎立の狀況を創出している。王世充・竇建德の兩者が打倒されたのち、河北の地では竇建德を繼承した劉黑闥によって、約一年半にわたる抵抗が持續された。唐政權は、竇建德・劉

黒闡の集團を平定して始めて確立をみた。當時「山東」或は「關東」と總稱された河北・山東・河南一帯の地域は、他地域と比べて數段上まわる熾烈な抗爭が展開されたが、とりわけ河北は煬帝の高句麗討伐の通路にあたり、最も早い時期から多くの農民を卷込んで始まっている。その上、河北地方は「それ河北なる者は、俗は儉、風は渾にして、淫巧生せず。朴毅堅強にして耕戰に果なり¹³⁾」といわれる氣風と、「河北は蠶綿の郷¹⁴⁾」という地味物産の豊かさとを兼ね備えているところでもあった。このような地域性を背景にして竇建德・劉黑闡集團が成立していることにも、注目されねばならないと思う。¹⁵⁾

本稿においては、竇建德・劉黑闡集團に焦點をあて、河北を中心にかれらが何を結集軸とし、如何なる社會の構築を志向したのか、またその集團總體のもつ意味が、北齊―北周―隋から唐に至る流れの中にどのように位置づけられるのか、を考察するつもりである。そして、この考察を通して、唐朝の構造ないしは性格との問題に對する再検討の方向を探りたい。¹⁶⁾

一 隋末唐初の群雄諸集團

大業七（六二）年の征遼を契機として始まる隋末の反亂は、大業九年の楊玄感の亂を経て、全國的規模で展開されるに至った。隋朝權力と農民起義との對抗關係を、漆俠氏は、第一期（六二〇―六二四年）の隋軍の優勢と農民軍の敗退、第二期（六二四―六二九年）の兩者の勢力均衡、第三期（六二九―六三八年）の農民側の優勢―隋の滅亡、と三段階に分けた把握を試みている。¹⁷⁾ このことを反亂勢力側の形態からみれば、初期の主として掠奪破壊本位の比較的小規模で地方的な段階から、次第に統合が進み、大業十二（六三六）年頃を境に群雄割據の情勢に突入した、といえるだろう。のちに「其の天下を爭わんと欲する者は十餘人に過ぎざるのみ¹⁸⁾」といわれるその群雄について、鈴木俊氏は「當時の社會の混亂に乗じて志を得ようとした野心家」と規定し、竇建德・李密・王世充・梁師都・薛舉・劉武周・蕭銑・高開道・劉黑闡・沈法興・李子通・羅藝の十二名を列舉して

いる。この十二名に續く存在には、李軌・徐圓朗・杜伏威・輔公祐・林士弘が擧げられる。この十七名のほとんどは、唐朝に倒されたり降服したりして消滅するが、かれらの出自や反亂内容を概観すれば次表の如くである。

分類	氏名	出自(本貫)	隋朝の官位	反亂	期間	主要活動地域	集團成立の基礎(背景)	典據
A	李密	隴西成紀人(一に遼東襄平人)	蒲山公、左親侍校尉、千牛備身	大業十二	武德元	洛口(興洛倉を中心とした河南・山東	○關隴集團の家に參加した。○楊玄感の亂に李密といふ農民を賑恤する。○洛口倉を李密といふ農民の過程で東都洛陽の實權掌握。○中核となる兵力は楚人部々の豪族で、隋末徒黨を組んでそむく。○占領後、突厥と連合して隋に家産鉅萬をもつ豪族で、任侠に富民を賑恤。隋末に郡縣の倉粟を發して農民を賑恤。	隋書書紀 新書書紀 舊書書紀 8554855485370
A	王世充	西城胡人(父收が羅城王榮の養子となる)	江都通守、内侍、尚書左僕射、總管内外諸軍事	武德二	同四	洛陽周邊の河南一帶	○關隴集團の家に參加した。○楊玄感の亂に李密といふ農民を賑恤する。○洛口倉を李密といふ農民の過程で東都洛陽の實權掌握。○中核となる兵力は楚人部々の豪族で、隋末徒黨を組んでそむく。○占領後、突厥と連合して隋に家産鉅萬をもつ豪族で、任侠に富民を賑恤。隋末に郡縣の倉粟を發して農民を賑恤。	隋書書紀 新書書紀 舊書書紀 8554855485370
A	梁師都	夏州朔方人	慶陽府郎將(大業末退いて歸郷)	大業十三	貞觀二	朔方郡を中心に隴陽・弘化・延安等の郡	○關隴集團の家に參加した。○楊玄感の亂に李密といふ農民を賑恤する。○洛口倉を李密といふ農民の過程で東都洛陽の實權掌握。○中核となる兵力は楚人部々の豪族で、隋末徒黨を組んでそむく。○占領後、突厥と連合して隋に家産鉅萬をもつ豪族で、任侠に富民を賑恤。隋末に郡縣の倉粟を發して農民を賑恤。	隋書書紀 新書書紀 舊書書紀 8554855485370
A	(薛仁果)	河東汾陰人(父の代に蘭州金城に遷る)	金城府校尉	大業十三	武德元	蘭州・秦州を中心に隴西の地	○關隴集團の家に參加した。○楊玄感の亂に李密といふ農民を賑恤する。○洛口倉を李密といふ農民の過程で東都洛陽の實權掌握。○中核となる兵力は楚人部々の豪族で、隋末徒黨を組んでそむく。○占領後、突厥と連合して隋に家産鉅萬をもつ豪族で、任侠に富民を賑恤。隋末に郡縣の倉粟を發して農民を賑恤。	隋書書紀 新書書紀 舊書書紀 8554855485370
A	李軌	武威(涼州)姑臧人	鷹揚府司馬(一に司兵)	大業十三	武德二	張掖・敦煌・西平・抱罕・武威の河西五郡	○關隴集團の家に參加した。○楊玄感の亂に李密といふ農民を賑恤する。○洛口倉を李密といふ農民の過程で東都洛陽の實權掌握。○中核となる兵力は楚人部々の豪族で、隋末徒黨を組んでそむく。○占領後、突厥と連合して隋に家産鉅萬をもつ豪族で、任侠に富民を賑恤。隋末に郡縣の倉粟を發して農民を賑恤。	隋書書紀 新書書紀 舊書書紀 8554855485370
A	劉武周	河間(瀛州)景城人(父の代に馬邑に遷徙)	建節校尉、のち馬邑で鷹揚府校尉	大業十三	武德五	馬邑(朔州)から山西西北方の地域	○關隴集團の家に參加した。○楊玄感の亂に李密といふ農民を賑恤する。○洛口倉を李密といふ農民の過程で東都洛陽の實權掌握。○中核となる兵力は楚人部々の豪族で、隋末徒黨を組んでそむく。○占領後、突厥と連合して隋に家産鉅萬をもつ豪族で、任侠に富民を賑恤。隋末に郡縣の倉粟を發して農民を賑恤。	隋書書紀 新書書紀 舊書書紀 8554855485370
A	羅(李)藝	襄州襄陽人(京兆の雲陽に寓居、父は隋の監門將軍)	北平虎賁郎將	大業十二	武德元	涿郡(幽州)中心の河北の北部	○關隴集團の家に參加した。○楊玄感の亂に李密といふ農民を賑恤する。○洛口倉を李密といふ農民の過程で東都洛陽の實權掌握。○中核となる兵力は楚人部々の豪族で、隋末徒黨を組んでそむく。○占領後、突厥と連合して隋に家産鉅萬をもつ豪族で、任侠に富民を賑恤。隋末に郡縣の倉粟を發して農民を賑恤。	隋書書紀 新書書紀 舊書書紀 8554855485370
B	高開道	勃海(瀋州)陽信人(燕、隋で生計を立てる)		大業十二	武德五	嬭州	○關隴集團の家に參加した。○楊玄感の亂に李密といふ農民を賑恤する。○洛口倉を李密といふ農民の過程で東都洛陽の實權掌握。○中核となる兵力は楚人部々の豪族で、隋末徒黨を組んでそむく。○占領後、突厥と連合して隋に家産鉅萬をもつ豪族で、任侠に富民を賑恤。隋末に郡縣の倉粟を發して農民を賑恤。	隋書書紀 新書書紀 舊書書紀 8554855485370
B	竇建德	貝州漳南人	里長(一時)	大業十二	武德四	河北の中・南部と山東の一部	○關隴集團の家に參加した。○楊玄感の亂に李密といふ農民を賑恤する。○洛口倉を李密といふ農民の過程で東都洛陽の實權掌握。○中核となる兵力は楚人部々の豪族で、隋末徒黨を組んでそむく。○占領後、突厥と連合して隋に家産鉅萬をもつ豪族で、任侠に富民を賑恤。隋末に郡縣の倉粟を發して農民を賑恤。	隋書書紀 新書書紀 舊書書紀 8554855485370
B	劉黑闥	貝州漳南人(家貧にして自ら給するなし)		武德四	同六	河北の中・南部	○關隴集團の家に參加した。○楊玄感の亂に李密といふ農民を賑恤する。○洛口倉を李密といふ農民の過程で東都洛陽の實權掌握。○中核となる兵力は楚人部々の豪族で、隋末徒黨を組んでそむく。○占領後、突厥と連合して隋に家産鉅萬をもつ豪族で、任侠に富民を賑恤。隋末に郡縣の倉粟を發して農民を賑恤。	隋書書紀 新書書紀 舊書書紀 8554855485370

A	B	B	A	B	B	B
蕭 統	林 士 弘	李 子 通	沈 法 興	輔 公 祐	杜 伏 威	徐 圓 朗
後梁宣帝の曾孫。煬帝の蕭皇后の外戚。	饒州鄱陽人	東海（沂州）丞人（貧賤で魚鹽に従事）	湖州武康人（父は陳朝の特進廣州刺史）	齊州臨濟人	齊州章丘人（貧しい家庭出身）	魯郡（兗州）人
巴陵郡（岳州）の羅川令			吳興郡守			
大業十三	大業十二	大業十一	武 德 元	武 德 五 年 中	大 業 十 一	大 業 十 三
武 德 四	武 德 五	武 德 四	同 三		武 德 四	武 德 五
江陵を都に揚子江中流域	虔州を中心に鄱陽湖以南の一帯	海陵→江都→餘杭と中心地を移動。江南方面を占有	餘杭・毗陵・丹陽等江表十餘郡	杜伏威の領土	歷陽（和州・丹陽（蔣州）を中心とする江淮の間	兗州を中心とした山東地域
名流と衆望を背景に、梁室の再興をかかげる。	同郷の賊帥操師乞の部隊を踏襲。	任俠性に富み、仁恕を示して人々の歸信を獲得し、土人層も優遇。長白山より南下。	南朝以来の土着の勢力で宗族數千家をもち、遠近から信服されていた。陳朝體制の復興を標榜。	杜伏威と刎割の交を結び、終始行動をとにもする。唐朝に不満をもつ分子を結集。	群盜に投じ兗州に據って李密・王世充と連なり、のち劉黑闥に呼應。	群盜に投じ兗州に據って李密・王世充と連なり、のち劉黑闥に呼應。
新舊書 8756	新舊書 8756	新舊書 8756	新舊書 8756	新舊書 8756	新舊書 9256	新舊書 8655

第一表に掲げた諸群雄は、その出自・活動領域・集團成立の背景から、大きく二類型に分けることができる。それをA型B型と分類するならば、A型に含まれるのは、隋朝地方官僚として民政或は軍事に携わるか、もしくは土着の豪族としての郷望を利用するかして蜂起した勢力であり、この両面は對立するよりは、むしろ往々積極的に結びついて集團の結成を容易にした。かれらは、蓄えられた隋朝の倉粟・兵器を掌握し、中途より短期間に勢力圏を擴大するが、一方では民衆の支持を獲得するために、一部隋朝地方官を惡者に仕立て上げ、それによって自らの立場の正當性を主張しなければならなかった。

他方、B型に屬するものは、隋朝權力機構内部に包攝されず、隋朝の壓迫のもとに郷村を迫られて群盜集團に身を投じ、そこに依據しつつ次第に頭角を現わし、遂には一大勢力を築くまでに至った存在である。隋末、全国各地に無數に興

起した群盜集團が、最終段階で竇建德・劉黑闥集團とその他少數を残すに過ぎなくなっていることは、B型の系列に所属する農民を主體とした勢力が、A型の系列下に併呑されてゆく趨勢を、はっきりと物語るであろう。

初期の群小諸集團が統合されたのちに出現する右の二類型は、さらに地域的側面においても一定の共通性を含んでいるように思われる。すなわち、B系列の活動地域は、北齊・陳の領土にあたった河北・山東から淮水・揚子江下流地方に集中している（沈法興の場合だけ異なる）。これは、一つには山東の長白山一帯（章邱・鄒平・長山諸縣の交界）に結集した初期の群盜集團が、隋朝の壓迫下に次第に江淮方面に南下していったことも關係しているが、その他に南北朝對立の過程で定着した地域的分立の影響を想定できないであろうか。それに對してA型に所屬する勢力は、河西方面から山西の馬邑・河北の幽州へと連なる邊境地帶と、太原に舉兵する李淵集團を含めて、北周・隋の基盤であった中央部とに成立した。そして、A型のうちでも、邊境地帶の集團が身動きできずに終るのに比べて、後者の樞要の地を占める勢力が統一事業を専ら推進するに至り、唐朝はその延長上に位置するのである。A型の勢力の成立過程からわかるように、それは隋朝體制と異質な存在ではなく、隋朝下で培養した權勢を混亂に乗じて擴張しようとした「野心家」といえるのではないだろうか。

隋末の群雄割據の實態が以上の論述の如く類型化できるならば、A型に包括される勢力は、唐李淵集團の進出に直面して動搖し、比較的容易に自壊作用を起こして組込まれていくのに對し、B型の勢力の多くは執拗に抵抗して唐の進出を阻もうと試みる。とりわけ、河北に據る竇建德・劉黑闥集團の平定に際し、その抵抗の激しさに、唐朝はほとほと手を焼かざるを得なかった。それが、劉黑闥征壓にあたり、高祖（李淵）をして一度は「黑闥に組みした一黨を盡く殺し、山東から反抗の動きを一掃しよう」とまで決意させ、次の時には「反抗に加擔した男子十五歳以上を全員院めにし、小弱者や婦女子全部を關中に驅り立てて京邑を充足させる」という措置の實行を考慮させているのである。統治形態を、安撫ではなく、壯丁の阬殺と小弱婦女の遷徙として唐朝に迫るところに、竇建德集團の獨自性があると思われる。

二 竇建德集團の成立

隋末に始まる諸反亂の最終段階において、關中に據る李淵の唐朝政權と、洛陽から河南一帯を占有する王世充と、河北主要地域および山東の一部を掌握した竇建德集團と、この三つの大勢力が鼎立する狀況を現出した。このうち、唐朝政權は、李淵の太原留守としての地位と權力を利用して組織された大將軍府のもとに、一舉に關中を占領し、甘肅方面の薛仁果（一説に果・薛舉の子）・李軌等を屈服させ、夏州の梁師都に打撃を與え、さらに舉兵の地山西を南下してきた劉武周を北方に退けて、最も優勢であった。また王世充は、李密との攻防戰の過程で東都洛陽の軍事權を掌中に收め、煬帝の子越王侗を弒して鄭國と號していた。兩者の勢力擴大には、「隋家は洛口倉に貯えて、李密之に因る。東都は布帛を積みて、世充之に據る。西京の府庫も亦、國家の用と爲りて、今に至るまで未だ盡さず」と語られる煬帝時代の莫大な蓄積物が、重要な關係をもっている。

一方河北においては、物産に恵まれ、高句麗遠征のための兵器や食糧に満ち、また臨朔宮中には珍品を盈積している涿郡（幽州）が北方に控えていたが、それ以外の地域には、荒廢狀態のなかで、大組織を維持發展するための財政的に頼れる存在はみられない。このような不利の狀態から出發する竇建德は、劣惡な條件を如何に克服して、河北一帯の支配權を確立したのであろうか。その經過を知るために、まず鼎立に至るまでの彼の軌跡を年次にしたがって考察し、その姿を浮彫りにしたい。

大業七年遼東遠征が強行される緊迫した情勢の下で、竇建德は官憲に追われて清河界中の高士達の集團に亡命した。ここに群盜の一員としての彼の生活が始まる。この頃から張金稱・高士達らの群盜が、豆子航（山東無棣縣西北）や高雞泊（山東恩縣西北）等の沼澤に身を隠しながら、掠奪を開始している。竇建德は高士達の信任を受けて、次第に頭角を現わす。

第二次征遼の最中の大業九年六月に、楊玄感の反亂が黎陽（河南濬縣）で勃發し、「亂に従う者市の如く」數日のうちに衆十餘萬を結集した。これに對して河北からの呼應はみえず、竇建徳の行動もまったく表面に現われないが、この亂を契機にして、群盜集團の擴大が促されたようである。

河北に向けての隋側の本格的攻勢は、大業十二年に入るとともに始まる。涿郡通守郭絢が南下し、煬帝が直接派遣した太僕楊義臣は、清河郡丞（のちに通守）楊善會と連絡して北上してくる。竇建徳は策略を用いて郭絢を殺し、首を高士達に獻じたものの、一方楊義臣・楊善會の攻撃によつて張金稱・高士達が倒され、竇建徳は窮地に立たされた。が、逃走の途中、幸い無防備に乗じて河間郡饒陽を占領し、兵三千餘を得て勢力を挽回する。そして楊義臣が江都にひきあげ始めると、ただちに張・高兩集團の殘兵を收容した。饒陽縣令宋正本は、彼の「謀主」として以後の河北平定に全面的に協力し、また隋朝の官僚や士族の子弟も徐々に加はして、「勝兵十餘萬人」を擁するに至る。その結果、翌大業十三年（義寧元年）正月に長樂王と稱して、獨立した勢力へと歩を踏み出す。

しかし「勝兵十餘萬人」を結集したといっても、確固たる基盤を築き上げたわけでもなく、結合關係は甚だ流動的で、依然として他の群盜集團と同じ地平にあった。同十三年七月涿郡通守薛世雄の南進にあたっては、兵糧もなくて動搖し、かろうじて河間近郊七里井で奇襲を用いて撃退できた程度であつた。

本格的に一大勢力として他の群盜集團に擢んでた行動形態をとり始めるのは、河間郡城を陥落させてからであり、そのためには、薛世雄撤退後から翌武徳元年七月に至る、丁度一年の期間が必要であつた。この間に、長安には唐朝が成立し、洛口倉に據る李密は、群盜からの脱却を志向して、着實に河南一帯に勢力を扶植しつつあつた。

河間郡を併合して郡丞王琮を瀛州刺史に任命したことは、河北郡縣の次々と降附する状況をもたらし、そこで瀛州樂壽に都を定めて金城宮を建設し、同年十一月に國號を夏と稱した。これ以降、それまでの群盜性を拂拭し、河北全域の統合に向けて活潑な行動を展開する。その年の末には、深澤（博陵郡所屬）に據り十萬の兵力を擁する魏刁兒を倒し、易州定

州等の北方領域を降している。また冀州を陥れて刺史麴稜(33)を捕虜とし、さらに清河(貝州)にまで進出しているようである。⁽³⁴⁾

翌武德二年には鋒先を一層南下させ、煬帝を江都で弑逆して聊城(當時魏州所屬)まで北上していた宇文文化及一派を、二月に滅ぼし、河北に浸透し始めていた唐勢力を牽制するために、東都と連絡をつけている。そして同月邢州を、六月に滄州を陥れた。續いて軍勢十餘萬を統率し、八月には洺州、進んで九月には相州を平定し、十月に衛州滑州をも併合して、唐朝勢力の一掃に成功した。この間、趙州が九月に加えられている。この勢は黄河を越えて山東方面にも波及し、徐圓朗をはじめ山東の諸州縣が歸附するに至った。

ここにおいて一應の河北平定事業の完了をみ、竇建德は洺州に萬春宮を築き、都をここに遷した。時に武德二年の十月であり、河間落城のち一年有餘にして、河北の主要部分―ただし對立抗爭狀態に終始した羅藝の據る幽州を除く―と、山東の一部地域に至るまでを、掌中に収めることに成功したのである。ここで蓄積された實力を背景に、武德四年五月の汜水の決戦に臨んでいく。

さらに竇建德を繼承した劉黑闥の行動にも言及する必要がある。竇建德が倒されたのち一旦はその集團は解體するのであるが、そこに参加した者に對する唐側の壓力が強められるとともに、劉黑闥を推し立てて再糾合が始まる。竇建德集團の再建を標榜するこの集團は、同年七月の旗上げから半歳の間に續々と呼應する部分を生み出して、舊勢力圏を完全に回復し、唐側に撤退を餘儀なくさせたのである。

翌五年正月に、舊時の参加者はほぼ全員を結集して再建が宣言されたが、それも束の間、三月に洺水城付近で六十餘日の對峙のすえ、秦王世民の軍勢にうち倒され、劉黑闥は突厥へと亡命する。しかし、この再興された集團は舊集團以上といわれる兵鋒の鋭さを發揮して、世民をしばしば窮地に陥れており、後の人をして「秦王之群盜を平ぐるに、黑闥最も堅敵たり」と嘆じさせている。⁽³⁵⁾

だが劉黑闥の反抗はそれで終息したのではなく、六月に突厥の兵力を借りて再度攻め入り、河北主要地域を短期間に征服し、唐朝の河北支配に動搖を與えた。この二度目の侵攻も結局安定をみないうちに、同年末皇太子建成の率いる唐軍に魏州館陶の地で潰滅され、翌年二月に劉黑闥の部下の手にかかって殺されたのである。竇建徳の集團を繼いだ劉黑闥が、舉兵より一年半の間、唐側の激しい攻撃にもかかわらず、二度にわたって河北を占領できたこと、それに積極的に加擔する廣汎な支持層をもっていたことは、當時の他の群雄集團にはみられない現象である。

三 竇建徳集團の構造

竇建徳が一個の集團を組織し、河北全域を掌握する過程は、三段階に區分して考察できる。第一期は、大業七年末より大業十二年の高士達が殺されるまで、第二期は、高士達・張金稱の殘兵を收容し、他方では饒陽を始めとする小城を陥落させて、竇建徳を中心とする集團の構築が進行する武徳元年七月までの段階であり、第三期は、河間郡城の攻略に成功し、それ以降短期間のうちに河北全城を席捲して、唐朝・王世充と正面から對抗できるまでに強大化する武徳四年五月までの過程である。いいかえれば、群盜時代・群盜から群雄への飛躍を準備する過渡期・群雄時代という形態を想定できる。隋末唐初の十餘年にも及ぶ混亂期をたどった反亂諸集團の典型的な姿は、竇建徳の場合に集約されてみられるのである。

大業十二(六六)年の末に「勝兵十餘萬人」を結集し得たことは、竇建徳の群雄へと進む以後の方向を決定づけた。では彼を一大集團の指導者として押し上げる力となったのは何であり、その集團の結集軸ともなるべきものは何であったのだろうか。

煬帝の「殘暴政治」による最大の被害を蒙ったのは河北地域であり、すでに大業四年の永濟渠開鑿にあたっては、壯丁だけでは足らず女性までも徴用しなければならなかった。それに續いて大業七年からは、高句麗遠征に向けられる軍

事・補給のための苛酷な供役、地方官の搾取行爲、その上に水災と重なって、重壓に耐え兼ねた民衆は「安居すれば則ち凍餒に勝えず、死期交ごも急なり。剽掠すれば則ち猶お生を延ばすを得。是に於いて始めて相聚まりて群盜と爲」ったのである。他方には奴隸への道も控えていた。⁽⁴¹⁾このように鄉村社會で生活できる基盤を失った民衆が、隋末唐初の群盜諸集團の主力を擔うのであり、それゆえかれらが究極的に志向したものは、荒廢した農村の復興と、そこでの日常的營爲を保證する集團を創出することにあつたと想定できる。とすれば、破滅の段階に至るまで肥大し続けねばならなかった隋朝體制に對して、これらの民衆はそのような隋朝體制を倒し、さらにこれを超えた新しい世界を模索するまでに進まないであらうか。

初期の諸群盜間の分立狀態は、隋朝側の彈壓を受けて危機的状況に追いつめられたが、そこからかれらの間に分裂を克服する努力が始まる。それは、杜伏威が「今、我は君と共に隋政に苦しみて、各おの大義を擧ぐ。力分たれ勢弱く、常に擒えらるを恐る。若し合して一と爲れば、則ち以て隋に敵するに足らん」と語る言葉に代表される如く、相互の協力關係を迫り、統合の氣運を醸成する。河北中央部から山東方面にかけては、群盜から頭角を現わした張金稱・孫宣雅・高士達・王薄・郝孝德らが、隋の強力な軍勢に對して共同戰線を結成していった。⁽⁴²⁾この情勢を最も早く自覺した李密は、隋の洛口倉を占據して群盜諸賊を糾合するのである。

竇建德は、張金稱・高士達のもとにいた群盜と饒陽周邊の住民を結集して自立した。彼がそのような行動に出ることができた要因は、河北一帯に有力な指導者が存在しなくなったという有利な形勢と相俟って、隋側の攻撃にさらされた群盜勢力が、分裂狀態を脱して隋の壓迫に抵抗できる強力な集團と新指導者の出現を待望していた、という點に求められる。高士達集團内で才略を認められて「軍司馬」に任命され、「毎に身を傾けて物に接し、士卒と均しく勤苦を執る。是れに由りて能く人の死力を致す」といわれるほどの衆望を、竇建德は獲得している。宗族を中核にそこに離散民を收容することによって構成されたと考えられる高士達集團の内部で、高氏一族に屬さない部分から、竇建德を推立する動きも窺うこ

とができる。彼の出現には、群盜世界で形成された輿望が深くあづかっていたのである。

この集團にみられる結合關係は、杜伏威の「假子」や高開道の「義兒」等の擬似血縁關係とは異なっている。むしろ、劉霸道が、遊俠を喜び、食客數百人を養い、隋末に至って遠近より彼のもとに結集してきた勢力を基礎にして蜂起した場合と同様に、竇建德についてもまた、「遊俠」的關係が結合の基軸となつてゐるに思われる。擬似血縁的結合が閉鎖性と表裏をなすのに對し、任俠的なそれは、相互信義に基づく各人の自發性に依據して、より廣い範圍に擴延する可能性をもっている。「山東は雄猛にして、由來氣を重んじ、一顧の勢、死に至るも回らず」といわれる「山東」のうち、とくに竇建德集團の成立を促す河北中央部の地域は、「人性多く敦厚にして、務めて農桑に在り」、「俗は氣俠を重んじ、好んで朋黨を結ぶ。其の相い死生に赴くも亦仁義に出ず」という任俠性が育成され得る風土であつた。同時に、河北中央部の清河（貝州）博陵（定州）が絹製品の産額と品質で他地域から擢んでおり、以前より養蠶が盛んであつたことは周知のことであるが、この養蠶作業にともなう鄉村の共同勞働も、任俠性の紐帶をさらに強める役割を果したのではないだらうか。煬帝による壓制の結果、鄉村から彈き出された民衆は、任俠的關係を媒介とした鄉村の再建を求めて竇建德の下へ結集していったと思われる。

群盜に投ずる前の竇建德はどうであつたろうか。「竇建德、貝州漳南の人。世々農を爲す。……材力絶人。少くして然許を重んじ、俠節を喜ぶ」とあるように、彼は遊俠心に富む人間で、貧しくして親の葬儀を行なえないでいた郷人には自分の耕牛を與えて無事終らせたこと、官憲の追求を避けて身を寄せた孫安祖には危険も顧みず匿まい逃亡させてやったこと、親交を結んでいた同郷の劉黑闥の經濟的窮狀には終始援助を惜しまなかつたこと、等々の一連の逸話を通じて、彼の俠節の姿が浮び上ってくる。鄉村における竇建德の行動は、一時里長に任命されたことと相俟つて、「父卒するや、里中の送葬するもの千餘人。贈豫する所は皆讓りて受けず」といわれる相互信頼關係を鄉村内部にもたらしており、その會葬者千餘名の數からいって、里（百戸）段階から縣規模に及ぶ關係の廣がりが推測される。

竇建德の獲得した聲望は、單に鄉村社會の範圍に止まるものではなかった。「時に諸盜の漳南を往來する者は、過ぐる所皆居人を殺掠し舍宅を焚燒するも、獨り建德の間に入らず」といわれ、彼の存在は廣く賊盜間にまで及んでいた。當時掠奪行爲に従っていた群盜も、「孝子」「義門」として鄉村社會で尊敬を受けた人々や、郷人に信頼された指導者が統率する村閭等の侵犯を避けている。本質的には、兩者は同一の基盤から出發したのであり、鄉村秩序と對立しない方向を模索し、さらには積極的にその矛盾を乗越えようと意識する部分をも生み出すのである。竇建德は孫安祖の高雞泊亡命に際して「逃兵及び産業無き者」數百人を付けてやったように、周圍に聲望を頼って集まる民衆をもつと同時に、かれらが群盜世界へ移行する橋梁の役割を擔っていた。言うなれば、鄉村と群盜のそれぞれの世界の結節點に、竇建德は位置を占めていたのである。それゆえ、彼が群盜の一員に参加したことは、兩世界の接近を促し、次の集團結成の段階で、任俠的結合關係によって、兩者の合體が實現するのである。

四 竇建德集團と士人層

竇建德集團は「任俠的結合」を軸に成立をみたが、この集團を單に一部地方割據の群盜に終らせず、河北のほぼ全域から山東方面を包む廣大な土地を支配し、唐朝・王世充の各勢力と正面から對峙できる集團に編成したのは、宋正本（饒陽令）・張玄素（景城戸曹）・王琮（河間郡丞）・孔德紹（景城丞）・劉斌（信都郡司功書佐）らの隋朝地方官僚出身者であった。

饒陽を陥れたとき、縣令の宋正本を優遇した結果、「此の後、隋郡の長吏、稍や城を以て之に降り、軍容益々盛ん」なる様相を呈して周邊勢力の参加に道を開いた。次に王琮を加えたことは、その傾向を一層助長し、竇建德集團の群雄への方向を決定づけた。このように、地方官僚層の加入は、群盜的性格をもつこの集團に合法性を付與し公權力化の作用を果したのである。

いわゆる「山東の名族」が、反亂狀態の普遍化と竇建德集團の成立の中で、如何なる去就を示すのか明らかでない。隋

朝側は都市住民と群盜との分斷を配慮したり、また博陵の崔氏出身の崔頤に「高陽（定州）襄國（邢州）を撫慰」させて、崔氏の影響下にあったと思われる八百餘人を「歸首」せしめたりして、兩者の接近抑制に留意している。だが唐朝の河北平定にあたって、博陵の崔氏の代表者崔民幹を山東道安撫副使に就け、山東の門閥對策に乗り出したことから、竇建德集團と「山東の名族」との間に接近がみられたと豫想できる。事實、清河の崔氏たる崔敬素が竇建德配下に加わり、同族の崔信明に「夏王英武にして天下を併吞するの心有り」といって、参加を勧める姿さえみえているのである。

竇建德集團において重用される隋朝出身官僚は、擢用されるに至る背景や竇建德との結合關係の點で、共通した傾向を示すように思われる。王琮は竇建德の一年餘の包圍にもかかわらず頑強に城を守り續けたすえ、煬帝弒逆の報に接して降服した。一旦その集團に加わってからは、竇建德のブレーンとして活躍して指導的役割を果し、それが倒れたのちも唐には降服せず、劉黑闥の再舉に參劃して唐と對立している。宋正本は「直諫を好み」「博學にして才氣有り」、積極的に河北平定策を進言して竇建德を助けた。次に張玄素は、景城戸曹として縣民に「清慎」さを慕われ、竇建德に殺されようとしたとき、替りに死にたいと申し出た縣民千餘人があったという。結局、「大王將に天下を定めんとせば、當に禮接を加え、以て四方を招くべし」とかれらが懇請したために許され、以後竇建德集團に協力するのである。また「清才有り」といわれ、竇建德の下で書檄をつかさどった孔德紹は、のちに唐に捕えられ、太宗非謗の件を責められながらも、自説を曲げることなく死に赴いている。劉斌は、竇建德—劉黑闥と續く期間を通じて立場を變えず、最後まで劉黑闥と行動をとともにし、突厥に亡命して行方が知れなくなっている。

竇建德は王琮の降服に際し、「往に泊中に在りて共に小盜たれば、容に意を恣にして人を殺すべし。今百姓を安んじて以て天下を定めんと欲す。何ぞ忠良を害するを得んや」といって、群盜からの訣別を宣言した。そこで士人層との融合が實現するのであるが、彼のこの姿勢について、從來の研究では「階級的裏切り」であり「封建政權」への變貌であると斷定することで終ってきた。だがそこからは、次の竇建德集團の急激な膨脹や、劉黑闥を中心とした持續する抵抗の意味

が、把握し切れないのではないだろうか。竇建德に重用される士人層の行動は、その集團の基底を支える任俠性と、決して低觸していないように思われる。かれらの一連の行動から知られるように、竇建德がかれらを承認するに至るのは、配下の民衆から遊離せず信頼關係によって民衆をまとめあげる行爲、また自らに課せられた任務を最後まで遂行し、信義に應えるべく全力を盡くそうとする意識、を重視したからに他ならない。それゆえ、この集團内で期待された士人層の役割は、下からの相互信頼を求める任俠性を、一個の政治體制にまで昂めることにあつた、といえるだろう。

このように成立し、擴大をはかる竇建德集團は、一貫して「義」「忠」を追求する。これらのモラルは敵對する隋の勢力に期待されるとともに、民衆に對してもそれをきびしく要求した。さらに河北に浸透し對立する唐勢力にも、同様に向けられる。唐の冀州刺史麴稜が激しい抵抗のすえ降ったとき、「卿は忠臣なり」として厚く禮遇された。そのちに降附した陳君賓・張志昂・張道源らについても、「人臣各おの其の主の用を爲す。彼堅守して下らざるは、乃ち忠臣なり。今大王之を殺さば、何を以て群下を勵まさんや」という國子祭酒凌敬の忠告をいれて許している。のち唐の名臣と稱えられる李世勣は、淮安王神通の河北平定に従つて竇建德の捕虜となり、父の蓋を人質にその集團に編入された。にもかかわらず彼は唐側に奔歸したが、「勣は本唐の臣にして、我に虜にせらる。其の主を忘れず、逃げて本朝に還るは、此れ忠臣なり。其の父何の罪かあらん」と述べて父親を許す寛容さを示した。一緒に捕われた淮安王も魏徵も結局は釋放されている。これらの事例から、あらゆる面に信義關係を成立させようとする竇建德の姿勢が理解できる。そしてその倫理性こそが、疲弊し分斷した河北の現實を救済するとともに、隋朝が喪失した公權力としての健全さを回復する契機である、と認識されていたのではないだろうか。

竇建德集團の性格は、一面では「城を平げ陣を破る毎に、得る所の資財は、並びに散じて諸將に賞し、一として取る所無し。又肉を噉わず、常食は唯菜蔬脱粟の飯有るのみ。其の妻曹氏、紈綺を衣ず。使う所の婢妾、纔かに十數人」という生活態度、また「寛厚にして諫に従う」という部下に對する姿勢、といった竇建德の個人的實踐にも支えられていた。そ

の上に、民生の安定を目差す彼の努力⁶⁴によって、「建徳、洛州に至るや、農桑を勸課す。境内盜無く、商旅野宿⁶⁵す」るほどの状態を生み出し、隋末以來續いた河北地方の動搖は、一應終息するに至るのである。民衆の意識と乖離せず、共通の世界に立脚しようとする竇建徳の意思は、民衆の願望と結合して、河北の地に一個の共同世界をもたらしたのではないだろうか。それゆえにこそ、次の段階でも、劉黑闥を擁立して、竇建徳の意圖した世界を體現せんとする運動が繼續するのである。

このような世界を隋末唐初の河北に一應達成させた竇建徳に對し、舊唐書の編者は、「建徳、義もて郷閭を伏し、河朔に盜據し、士卒を撫馭し、賢良を招集し云々⁶⁶」と記して、一定の評価を與える。さらに後世の王鳴盛をして、「建徳、宇文化及を討ち、能く義舉を爲し、人心を得たり。又盡く河北山東を收む。地勢極めて強く、唐の最も忌む所⁶⁷」なるイメージを抱かせた。谷川道雄氏は、竇建徳集團の築いた世界を「禮節の國⁶⁸」と定義した。事實、當時の情勢の中で特異な内實を漂わせた世界であつた。

おわりに

河北山東地域に勃發した諸反亂の最後の到達點たる竇建徳集團は、結局は唐勢力の前に屈服させられ歴史の舞臺から姿を消す。李淵集團が諸群雄中から擢んでた理由について、漆俠氏は、突厥に依附しながらも獨立の地位を保持したこと、關隴集團に屬したが反隋の立場に據ったこと、李淵の貴族たる地位を背景にして多數の地主分子の支持を獲得したこと、經濟軍事の両面で他よりはるかに勝っていたこと、の四點に求めた⁶⁹。竇建徳集團の敗退の要因は、逆にその指摘の中に明らかとなるのであるが、これ以外に、李淵がその集團の結成にあたり、太原留守下の體制を大將軍府に移行させて求心的結合の根幹を設定し、同時に強力な官僚機構を組織させた如き姿は、竇建徳の場合に見られなかった、という面にも注目する必要がある。その集團を支える任俠的結合様式は、河北一帯の民衆の積極的參加を促した半面、浮動的分散的傾向を

生み出さざるを得ず、また他地域への擴大にも一定の限界性をもっていたのである。このような集團が内包する弱さを、竇建德は信義關係の徹底的な追求によって克服しようとしたのではないだろうか。それゆゑ集團内の緊張狀態の弛緩にともなつて、動搖は避けられなかつたのである。

しかし、右の如き問題點と限界性を露呈し結局は滅亡させられたからといって、この集團が備えた意義を全面的に否定し去ることはできない。ではこの集團は如何なる歴史的課題を擔つていたと考へたらよいのであろうか。前節までの考察を通じて、隋朝支配體制に疎外されたところから出發した河北民衆が、鄉村社會の自律性の回復とそこに依據する共同體の形成を志向して明確な姿を現わしていることを知ることができた。この動きは統治に臨んだ唐朝側の姿勢に波及するはずである。例えば、玄武門の變が帝位をめぐる皇太子建成と秦王世民の對立を本質としながら、それに至る兩者の勢力確立の過程には、秦王側が「山東の豪傑」との結合に精力を傾けて多數の「東人」を配下に加え、他方皇太子側も「山東の豪傑を結納する」ことに留意しているように、「山東」勢力の存在が重視されている。この背後には、竇建德・劉黑闥集團を通して現われた河北を中心とする「山東」地域の動向が、強く意識されていると推測できる。にもかかわらず、「山東」地域には各處に「人多く疆暴」なる雰圍氣や不満を抱いて反抗を試みようとする動きが残存し續けるのであり、太宗と高宗による人材吸收策も一面においてその傾向を裏づけていると思われる。このような唐朝に對する反抗の姿勢は、武后朝に及んで遠心化の行動となつて表面化し、體制側に深刻な危惧の念を與えるに至っている。安史の亂もこの流れの上に位置づけられるのであろう。

以上概観してきた如く、唐朝支配下の「山東」地域に根強く存續した遠心的志向が、竇建德集團の活動に端を發していると認められるとき、この集團の底流には、單に煬帝の暴政に對する反抗に止まらず、隋朝とそれを繼承した唐朝とによる統治體制總體を否定し克服しようとする意識が隠されていたと豫想される。とすれば、隋末唐初での飛躍を可能ならしめる動きが、それ以前の段階において準備されていなければならない。その胎動は早くも北齊滅亡直後の北周武帝のとき

に、「齊の舊俗、未だ昏政を改めず、賊盜姦宄、頗る憲章に乖る」様相を呈して始まっている。隋朝に移っても「物情尙お梗」なる状態が續き、「是の時（開皇三年の頃）山東尙お齊俗を承け、機巧姦僞にして役を避け惰遊する者、十に六七。四方の疲人或は老と詐り小と詐り、租賦を免れんと規る」、また「時に山東齊の弊を承け、戸口の簿籍、類ね實を以てせず」という有様であつた。その他、「冀州俗薄にして、市井姦詐多し」、「衛土俗薄なり」、「曹土の舊俗、民姦隱多しして、戸口の簿帳、恆に實を以てせず」、「鄴都俗薄にして、號して化し難しと曰う」、汴州の「殷盛にして多く姦俠有り」、といった様々な支配の困難さが各地にみられたのである。これらの動きは、二十餘年にわたる文帝の治世によって一應鎮靜されたようにみえながらも、決して途絶えてしまつたわけではなく、體制内部の動搖を契機に再び活動し始める可能性をはらんでいた。竇建德集團の成立にあたっては、この長年にわたる活動が大きく影響しているように思われる。

北周末より隋にかけてみられた「山東」地域の動きは、それがしばしば「齊俗を承け云々」といった形で表現されていることから理解できるように、北齊社會と密接にかかわつていた。北齊時代へ逆行しそこの鄉村のあり方に目を移せば、小農民を主體に構成された郷黨社會が、「士大夫の大土地所有」と矛盾衝突することなく存在している姿を引出すことができる。「士大夫の大土地所有制」は、後漢末河北徐無山中出现した田疇統率の自治聚落以來、華北社會に深く根ざし成立してくるのであるが、北齊に生きた李士謙の場合において典型的に認められる。彼は、趙郡の李氏に出自して大土地所有者であると同時に、教養豊かな知識人でもあり、その上、郷黨社會のあらゆる問題に關與して信頼され、郷人の困窮する者には進んで賑施を果した。これに對して農民は、彼に尊敬を寄せ深く恩義を感じている。このような兩者の關係から、そこに相互友誼に基づく「齊民的世界」を見出せるのである。そしてこの兩者における具體的結合を可能ならしめたのは、李士謙と個人的關係にあり一方郷黨を代表する「州里の父老」層であつた。このような世界における郷黨社會は、一定の自律性を保持していたと考えられ、またこの傾向が北齊社會全般にある程度共通性をもつてみられるのではないだろうか。

以上論じてきたところにより、北齊の士大夫の大土地所有形態を中軸とする世界と隋末唐初の竇建德集團との間に、北周末より隋朝にかけて現われた「山東」の動向を媒介として、關連性が存在していることを知る事ができる。すなわち竇建德集團は、竇建德のもつ土豪110小地主出身としての階級性に依據して成立するのではなく、彼が郷村の指導者（父老）の立場にあり、かつ河北社會を貫く任俠性を最もよく體現する存在であったことに負っているものであり、それゆえ、士大夫の大土地所有と鄉黨社會とが創出した齊民的理念は、のちの竇建德集團にも投影されているのである。だが他方、前者における士大夫の大土地所有者―父老層―鄉黨という階層的關係が、後者において士大夫層の缺落により、父老層―郷村社會の關係へ轉化していることにも注目されねばならない。このことは、隋末唐初に至って、士大夫層に替って父老層が擡頭し、それにもなつて郷村社會の地位も上昇したことを意味しているのである。111北齊滅亡後、士大夫層が體制内へ吸収されたあとを承け、殘された父老層を中核とする鄉黨社會は、中央集權化によってその自律性を抑制し解體しようとする隋朝と對立しつつ、底流に地位向上の志向をもって獨自の活動を續け、最後に竇建德集團の成立を促した。隋の滅亡には、その中央集權化政策と郷村社會との間に横たわる矛盾の顯在化としての一面をみないわけにはいかない。112

これまで竇建德集團の歴史的課題を明らかにするために、その前後の河北を中心とする「山東」地域の動向を探ってきたが、そこから、活動し續ける郷村社會の存在を知ることができた。竇建德集團を通して明確な姿を現わしたこの動きは、唐朝治下においても遠心化の傾向を保持するのであり、そのことは必然的に、統治に臨んだ唐朝側の姿勢に影響を及ぼすはずである。すでに「讓歩政策」として考察されてはいるが、とくに「山東」地域に關して一二指摘することができ、唐朝は折衝府を關中・河東に集中的に配置し、「重首輕足」「居重馭輕」の體制を確立したが、その偏置の主たる目的が、大きく言えば「山東」をさらに限定すれば河北の地を抑壓することにあつた、とする谷霽光氏の解釋は注目に價する。113そのうえ河北の折衝府分布状態をみれば、竇建德集團の出現を助けた中央部が、他の折衝府による包圍の中に置かれていることを知るのである。114さらに隋から唐に至る戸口統計の變動によっても、「山東」地域が唐朝に與えた影響の大き

道 名	隋 朝 (大業時)				唐 朝 (貞觀時)					唐 朝 (天寶時)		
	郡	戸 數	順 位	%	州	戸 數	順 位	%	隋を 100とす る指數	戸 數	順 位	%
關 内	16	90,6121	3	10.0	20	41,1187	2	14.2	45.4	82,1845	5	9.2
河 東	14	86,7340	4	9.6	16	26,0437	6	9.0	30.0	54,7311	7	6.1
河 北	20	227,6780	2	25.1	22	36,6795	4	12.7	16.1	151,4167	3	16.9
河 南	24	261,7985	1	28.9	24	21,3672	7	7.4	8.2	179,5547	2	20.1
劍 南	(18) 17	44,3182	6	4.9	25	55,5424	1	19.1	125.3	96,5439	4	10.8
隴 右	(16) 12	16,9067	10	1.9	18	5,0145	10	1.7	29.6	12,0922	10	1.4
淮 南	10	43,9947	7	4.8	12	8,6917	9	3.0	19.8	41,2448	8	4.6
江 南	27	35,6516	9	3.9	36	39,2753	3	13.6	110.2	188,7186	1	21.1
山 南	25	62,1152	5	6.8	34	21,1643	8	7.3	33.6	56,6883	6	6.2
嶺 南	20	37,1701	8	4.1	45	34,7719	5	12.0	93.5	32,3612	9	3.6
計	(190) 185	906,9791	—	100	252	289,6692	—	100	31.9	895,5360	—	100

さがわかる(戸數統計表参照)。すなわち河北道は河南道とともに、隋朝において重要な地位を占め、兩者の合計戸數は五十四パーセントと壓倒的多數であったが、貞觀年間には全體の五分の一に低下し、四百萬戸以上を失うに至っている。この状態は最盛期の天寶年間に進んでも十分な回復をみず、隋代の戸數に遠く及ばなかった。これらのことは、隋末唐初期の戦亂による死亡等の實態を意味する以上に、河北河南に對する戸口の檢括が順調に進行しなかったという現實を物語っていると思われる。

「山東」一帯に對する勢力浸透の困難さが故に、唐朝は劍南道や江南方面の掌握に努めたのではないだろうか。隋唐兩朝の統計に現われた河南河北と江南方面との地位の變動が、その推測を助けているようにみえる。¹²²⁾

全國的規模で展開された動亂の過程を経て成立した唐朝は、當初より「山東」地域にみられる如き遠心的な動きを抱え込まねばならなかったのである。にもかかわらず、短命に終ることなく唐帝國として隆盛を誇るに至るのは何故であろう。一つの解答としては、分離化の傾向を完全に抑制せずにある程度容認し、そのことによってむしろ安定性を確立した、という點にあると思われる。¹²³⁾

註

- (1) 岑仲勉著『隋唐史』（北京 高等教育出版社 一九五七年）上册、「隋史」第一九節「義師蜂起」の項に、百餘名の反亂指導者が列擧されている。
- (2) 布目潮瀨著『隋唐史研究』（東洋史研究會 一九六八年）一三頁。
- (3) この論争は、吳澤・袁英光「唐初政權與政争の性質問題——唐初武德・貞觀年間の階級闘争與統治階級内部闘争」（歴史研究 一九六四年二期）による問題提起と、それに對する齊陳駿「試論隋和唐初的政權——與吳澤・袁英光兩同志商榷」（歴史研究 一九六五年一期）・梁森泰「關於唐初政權性質的幾個問題」（同六期）による批判を通じて知ることができる。だがこの論争では、世族・庶族の定義があいまいであることも手傳つて、十分な成果をあげたといえない。
- (4) 鈴木俊「隋末の亂と唐朝の成立」（史淵五三）。
- (5) 漆俠著『隋末農民起義』（上海 華東人民出版社 一九五四）年）。隋末唐初の農民起義に關する中國史學界の動向は、ほぼ漆俠氏の研究に従つてゐるに思われる。
- (6) 横田滋「七世紀初頭の中國における内亂に就いて」（下）（東洋史研究第一二卷第五號）八四頁。
- (7) 隋書卷二四、食貨志、煬帝大業九年の條。
- (8) 姜伯勤「隋末奴軍起義試探」（歴史研究 一九六三年四期）
- (9) 谷川道雄著『隋唐帝國形成史論』（筑摩書房 一九七一年）の序説「隋唐帝國の本源について——中國中世の國家と共同體——」参照。
- (10) 漆俠氏前掲書、六九頁。
- (11) 樊川文集卷五「戰論」の項。
- (12) 通鑑考異卷九「武德五年」十二月壬申、黑闥衆潰」の條所引の太宗實錄。
- (13) 當時の河北のもつ地域性に注目した論文に、谷霽光「安史亂前之河北道」（燕京學報一九九期）がある。
- (14) 竇建德を詳細に扱つた論文に、鈴木義雄「隋末に於ける竇建德について」（國學院高等學校紀要一三）があるが、氏と筆者とは位置づけと理解とで多く相違しており、本稿においてそれらを明らかにしたい。
- (15) 漆俠氏前掲書五〇～一頁。
- (16) 通鑑卷一九二、武德九年十二月の條。
- (17) 鈴木俊氏前掲論文。
- (18) 市村瓊次郎著『東洋史統』（富山房 一九四〇年）卷二の三〇～五頁、漆俠氏前掲書七一頁、范文瀾著『中國通史簡編』修訂本（北京 人民出版社 一九六五年）第三編第一冊六三～七〇頁参照。
- (19) 李密に關しては、布目氏の研究に従つた（前掲書上篇第二章「李密的叛亂」）。反亂期間はその群衆が各集團の指導者となつてゐた時期とし、各書で繫年が異なる場合は原則として通鑑の記載による。なお羅藝の蜂起の時点は、漆俠氏の指摘（前掲書一一九頁）にあるように不明瞭であり、岑仲勉著『隋書求是』（北京 商務印書館 一九五八年）でも明らかにされていない。

- (20) 漆俠「有關隋末農民起義的幾個問題」(歷史教學叢刊第一輯『中國農民起義論集』所收、歷史教學月刊社編一九五四年)。なお當論文は李光壁等編『中國農民起義論集』(生活・讀書・新知三聯書店 一九五八年)に再録されている。
- (21) 通鑑考異卷九、「(武德五年)十二月壬申、黑闥衆潰」の條所引の太宗實錄。同様の記事が、新唐書卷二、太宗本紀の武德五年正月の條に載せられている。
- (22) 李淵の太原留守と大將軍府構成についての詳細は、布目氏前掲書上篇の第三章「李淵の起義」を参照。
- (23) 舊唐書卷七四、馬周傳。
馬周が続けて、「向に洛口・東都をして粟帛無からしむれば、則ち世充・李密未だ必ずしも大衆を聚むること能わず」と的確に指摘した内容は、同時に李淵集團にも共通する弱點である。
- (24) 李淵集團の場合は、別に太原に、武德二年の段階で、「強兵數萬、食支十年」(舊書卷六四、巢王元吉傳)といわれる蓄積がみられる。また冊府元龜卷四九八、邦計部・漕運門・唐高祖の條に
(武德)二年閏二月、太府少卿李襲譽、運劍南之米、以實京師。
とあり、隋末の亂離を経験しなかつた劍南の地を早く支配し、そこからの食糧補給に依存できたことも無視できない。
- (25) 舊唐書卷五六、羅藝傳參照。
- (26) 新舊兩唐書の竇建德傳と通鑑の記載を中心に論述するが、とくに年月においては相互に異同があるので、その點に關しては通鑑の繫年に従つた。
- (27) 高敏「隋末農民起義首先和集中爆發于山東地區的原因初探」(史學月刊 一九六五年七期)によれば、隋末山東地區的群盜は、(一)太行山脈東側沿いの南北に連なる地域、(二)永濟渠沿岸の沼澤地帶、(三)黃河下流沿いの兩岸一帯、の三地域に據點を求めたという。(四)の地域には漆俠氏の重視する長白山が含まれ、豆子航・高雞泊は(二)の地域に屬する。
- (28) 隋書卷七〇、楊玄感傳參照。
- (29) 布目氏前掲書二八〇三頁參照。
- (30) 通鑑卷一八二、大業九年三月の條に
時所在盜起。齊郡王薄、孟讓、北海郭方預、清河張金稱、平原郝孝德、河間格謙、勃海孫宣雅、各聚衆攻剽。多者十餘萬、少者數萬人。山東苦之。
とあり、さらにこの後に楊玄感の亂を経過することを考えるならば、竇建德の兵力十餘萬人も決して驚くにあたらない。
- (31) 通鑑考異卷八「竇建德破世雄」の條所引の革命記に、
時建德以無糧食、兵士先皆分散、餘軍不滿千人。在武強縣境收麥充食。聞世雄兵至河間、惶懼無計。
舊唐書卷一八五上、張允濟傳に
遷高陽郡丞。時無郡將。允濟獨統大郡。吏人畏悅。及賊帥王須拔攻圍時、城中糧盡。吏人取槐葉菓節、食之。竟無叛者。
とあることから、當時高陽郡(定州)を統率したのが張允濟で、彼は王須拔―魏刁兒の群盜による攻撃にもかかわらず持ちこたえたことがわかる。彼はその後、竇建德の攻撃を受けて、その配下に組入れられたものと思われる。なお張允濟の行動は、それ以後貞觀初年に至るまで不明である。

(33) 隋の信都郡丞の麴陵は、すでに武德元年六月に唐に降り、冀州刺史に任命されていた。

(34) 通鑑考異卷九「武德二年九月己巳、竇建德陷趙州」の條に、

(高祖) 實錄、今年三月、建德陷趙州。此又云陷趙州。蓋重複。或三月是貝州。唐統紀唯有九月陷趙州。今從之。

と記載し、貝州が竇建德に陥った時期を武德二年の三月と推測しているが、本文中の三月の條には記されていない。しかし、隋書卷七一、楊善會傳によれば、

建德既下信都、復擾清河。善會逆拒之、反爲所敗、嬰城固守。賊圍之四旬、城陷爲賊所執。

とあり、信都(冀州)降伏後、清河(貝州)が約一ヶ月餘りで降されていることから、信都陥落の十一月から通算して、武德元年の末より翌年の一月に至る期間に征服されたと想定できる。二年一月までに竇建德が清河を平定したことによって、續く二月からの魏州方面への進攻が可能となったと思われる。

(35) 通鑑卷一九〇、武德五年三月丁未の條の胡註。

(36) 漆俠氏は前掲論文(生活讀書新知三聯書店の出版本所收)で「附記」もつけ、劉黑闥が突厥の兵力を借りて河北を席捲し且つ突厥の中國分斷策に加擔したことを非難し、何らの意義も認められないとしているが、その論理は餘りにも「統一」を重視する立場に片寄りすぎている。

(37) 隋書卷二四、食貨志、大業四年の條參照。

(38) 反亂勃發前の様相については、横田氏前掲論文(上)(東洋史研究 第一二卷第四號)の五〇一頁、布目氏前掲書の第一章第二節「楊玄感の叛亂勃發前の形勢」を參照。

(39) 隋書卷二四、食貨志、大業七年の條參照。

(40) 通鑑卷一八一、大業七年十二月の條。

(41) 隋書卷三、煬帝本紀、大業七年の秋の條參照。

(42) 通鑑卷一八二、大業九年十二月の條。

(43) 齊郡の賊帥王薄は、齊郡丞(後に通守)の張須陁に屢々撃退された。隋書卷七一、張須陁傳によれば、

(王) 薄復北戰。連豆子航賊孫宣雅・石砥闇・郝孝德等衆十餘萬、攻章丘。

とあり、王薄は諸賊と連合して張須陁に立向かっている。その後にも、

後數旬、賊帥秦君弘・郭方預等、合軍圍北海。兵鋒甚銳。

とあって、張須陁の隋軍に對抗するために群盜間の協力がみられる。また同卷の楊善會傳によれば、

(張) 金稱復引勃海賊孫宣雅・高士達等衆數十萬、破黎陽而還。軍鋒甚盛。

とあり、共同行動が窺える。その他に隋書卷六三、楊義臣傳からも、高士達・張金稱・格謙らが相互に影響しあっていたことが推測できる。

(44) 舊唐書卷五四、竇建德傳。

(45) 通鑑考異卷八、「楊義臣破高士達……」の條に所引の革命記參照。

(46) 舊唐書卷五六、輔公祐傳、同 王雄誕傳及び同書卷五五、高開道傳參照。ほかに杜伏威には「上募」という特別編成の軍隊がある。唐初期には、張亮が「義兒」五百人を養い、叛意を抱いたかどで太宗に殺されている(同書卷六九、張亮傳)。竇建

徳集團にあつても、「餘黨欲立建徳養子爲主」(舊書寶建徳傳)

とあり、また「建徳將高雅賢、甚愛之、養以爲子」(舊書卷八三、蘇定方傳)と記され、「養子」の存在が知られるが、眷屬全員が殺され、子供も生まれたばかりであつた寶建徳の場合には、この養子に後繼者たる意味がこめられており、郷黨から信頼された蘇定方の場合には、獨立性を保つたまま養子關係を結んでいるのである。栗原益男氏が指摘された隋末唐初集團型假子——完全な家父長的專制的權力主體者たる假父のもとで、集團の一員として没個人的兵的作用を擔い、一般の家臣團と對立する存在——の形態は、寶建徳集團にはみられない。その「養子」關係は、むしろ任俠的結合の上に想定できる(唐五代の假父子的結合の性格)史學雜誌第六二編第六號参照)。

(47) 通鑑卷一八一、大業七年十二月の條參照。

(48) 舊唐書卷八九、狄仁傑傳。

(49) 隋書卷三〇、地理志中、冀州の條のうち、信都・清河・河間・博陵・恒山・趙郡・武安・襄國の部分。

(50) 太平寰宇記卷五八、貝州の條に

土產、白氈貢・靴氈貢・絲布・縹・絹。按隋圖經云、清河絹爲天下第一。

と記載されている。通典卷六、食貨 賦稅下(大唐)の博陵郡(定州)の條に羅列されている絹製品は、産額量と品目數で他地域と格段の差があつたことを明らかにする。また太平廣記卷一七四「陽玠」(出談藪)の項に、

定州人以綾綺爲寶、滄州人以魚鹽爲寶。と述べられている。

(51) 太平廣記卷一三一「冀州小兒」(出冥報記)によれば、

隋開皇初、冀州外邑中、有小兒。……村南舊是桑田、耕訖末下種。……時村人出田採桑、男女甚多。……至于食事、採者皆歸。とあつて、村邑周辺の桑田で共同して働く様子が看取できる。養蠶には多くの勞力と共同作業が必要なのである。

(52) 新唐書卷八五、寶建徳傳。

(53) 以上の逸話は、舊唐書卷五四、寶建徳傳參照。

(54) 舊唐書卷五五、劉黑闥傳參照。

(55) 新唐書卷八五、寶建徳傳。

(56) 隋書卷七七、李士謙傳によれば、

開皇八年、終於家。時年六十六。趙郡士女、聞之莫不流涕。曰、我曹不死、而令李參軍死乎。會葬者萬餘人。

とあり、趙郡の李氏たる李士謙の死去に郡(州)中より萬餘人の會葬者があつたが、これと比べて、「千餘人」とは縣單位の廣がりを示すのではないだろうか。

(57) 舊唐書卷五四、寶建徳傳。

(58) 隋書卷七二、華秋傳、舊唐書卷一八八、李知本傳及び張志寬傳參照。

(59) 舊唐書卷一八五上、李君球傳及び同書卷一八八、劉君良傳參照。

(60) 舊唐書卷六七、李勣傳に

大業末、韋城人翟讓、聚衆爲盜。勣往從之。時年十七。謂讓曰。今此土地、是公及勣鄉壤、人多相識。不宜自相侵掠。且宋鄭兩郡、地管御河。商旅往還、船乘不絕。就彼邀截、足以自相資助。讓然之。於是劫公私船取物。兵衆大振。

同 卷五六、李子通傳に

隋大業末、有賊帥左才相自號博山公、據齊郡之長白山。子通歸之、以武力爲才相所重。有鄉人陷於賊者、必全護之。時諸賊皆殘忍。唯子通獨行仁恕。由是人多歸之。

61) 舊唐書卷五四、竇建德傳。

なお通鑑によれば「無賴少年」と記されている(卷一八一、大業七年十二月の條)。

62) 舊唐書卷五四、竇建德傳。

63) 隋書卷四、煬帝本紀下、大業十一年二月庚午の條參照。

64) 隋書卷七七、崔暉傳(付崔廓傳)。

なお高陽郡とは博陵郡の改名である(隋書卷四、煬帝本紀、大業九年冬十月乙酉の條)。

65) 布目氏前掲書の一八五～六頁參照。

66) 舊唐書卷一九〇上、崔信明傳。

新唐書卷七二下の宰相世系表によれば、崔信明・敬素の兩名は清河青州房に屬する。この他に竇建德の下で河東裴氏出身の裴矩が優遇されたのも、「朝儀を制定」する以外に、彼の北齊以來の名望を利用しようとする意圖が隠されていたのではないだろうか(隋書卷六七、裴矩傳參照)。

67) 舊唐書卷五四、竇建德傳參照。

68) 竇建德が宇文化及の軍を黎陽に破ったとき、その配下にいた鄭善果に對して

建德將王琮獲善果、誚之曰。公隋室大臣也。自尊夫人亡後、而清稱益衰。又忠臣子奈何爲殺君之賊、殉命苦戰、而傷喪若此。善果深愧恨、欲自殺。爲中書令宋正本、馳往救止之。建

德又不爲之禮(舊唐書卷六二、鄭善果傳)。

と記される行動を王琮がとっていることから、彼が竇建德集團内で果たした役割を想像できるだろう。

69) 通鑑卷一九〇、武德五年春正月の條參照。

70) 舊唐書卷五四、竇建德傳。

71) 通鑑卷一八五、武德元年七月の條參照。

72) 舊唐書卷七五、張玄素傳參照。

張玄素は唐の太宗にも擢用されて民政の安定に盡力するが、彼は貞觀後半期の庶族地主を代表する一人であるといわれる(吳澤・袁英光前掲論文參照)。

73) 隋書卷七六、孔德紹傳參照。

74) 新唐書卷一九六、孔述睿傳參照。

75) 隋書卷七六、劉斌傳參照。

76) 舊唐書卷五四、竇建德傳(傍點筆者。以下同じ)。

77) 隋書卷七一、楊善會傳參照。

78) 舊唐書卷五四、竇建德傳に

滑州刺史王軌爲奴所殺。攜其首而奔。建德曰。奴殺主爲大逆。我何可納之。命立斬奴、而返軌首於滑州。吏人感之、即日而降。

79) 通鑑卷一八六、武德元年十一月の條。

80) 通鑑卷一八七、武德二年九月庚寅の條。

81) 舊唐書卷五四、竇建德傳。

82) 83) 舊唐書卷五四、竇建德傳。

84) 太平寰宇記卷五八、貝州清河縣の條に、枯下漳渠者滑漳渠也。自鄴縣界來非濁漳也。隋大業中、制使

姚暹疏決、從上漳渠、水入此渠。亦名姚還河。……大業十三年、竇建德于廣平郡（洺州）又疏此水、入柳溝、遂與永濟合流。

とあり、竇建德の群盜から群雄への過渡期に、このような土木工事を實施している。また佛教の保護にも努めていることが、大業末、賊徒起。領門人至衛州隆善寺。仍爲僞夏竇建德・齊善行等請知僧事。（續高僧傳卷二五、釋僧倫傳。）

という記事から看取できる。河北は北魏以來大乘教を信奉する「佛教匪」の亂が頻發しており（塚本善隆著『支那佛教史研究』北魏篇所收の「北魏の佛教匪」、隋末にも高曇晟の亂がある（舊書、高開道傳參照）。

85 通鑑卷一八八、武德三年二月の條。

86 舊唐書卷八四、竇建德傳、史臣曰の條。

87 十七史商榷卷七〇「擒竇建德降王世充」の項。

88 谷川道雄著『唐の太宗』（人物往來社 一九六七年）。

89 漆俠氏前掲書一一六頁。

90 註の參照。

91 小笠原正治「隋朝末期の動亂における官僚群」（史潮四三）は、隋末唐初の混亂期を終息させ唐朝の成立を促した官僚群の役割を高く評價している。

92 武勇の最もすぐれた王伏寶を讒言に従つて殺したことは、「後用兵、多不利」の状態をもたらし、また諫言に努めた宋正本も讒言によつて殺された結果、「是後、人以爲誠、無復進言者。由此政教益衰」という沈滞を示すに至つた（舊書、竇建德傳）。

93 布目氏前掲書下篇第三章「玄武門の變」參照。

94 通鑑卷一九一、武德九年六月の條參照。

95 舊唐書卷六四、隱太子建成傳參照。

96 通鑑卷一九〇、武德五年十一月の條。

97 新唐書卷一九八、顏游秦傳（附顏師古傳）。

98 新唐書卷七八、廬江郡王瑒傳參照。

99 唐大詔令集卷一〇二、選舉上「採訪孝悌儒術等詔」（貞觀十一年四月）、「河南河北江淮採訪才傑詔」（顯慶元年十月）參照。

100 陳伯玉文集（四部叢刊本）卷八「上軍國機要事」參照。

101 谷霽光氏前掲論文參照。

102 隋書卷二五、刑法志。

103 隋書卷二五、和洪傳。

104 隋書卷二四、食貨志、開皇三年の條。

105 隋書卷五六、令孤熙傳。

106 隋書卷四六、趙張傳。

107 隋書卷五四、元亨傳。

108 隋書卷五五、乞伏慧傳。

109 隋書卷七三、樊叔略傳。その他、鄭（相州）に関する記載は、

隋書卷四六、長孫平傳、同卷七三、梁彥光傳及び同卷三〇、地理志中も參照。

110 隋書卷五六、令孤熙傳。

111 煬帝が即位したのち、長孫晟にむかつて「今相州之地、本是齊都。人俗洶浮、易可搖擾。儻生變動、賊勢即張」（隋書卷五一、長孫晟傳）と語り、衛玄（文昇）には「魏郡名都、衝要之所。民多姦宄。是用煩公」（同卷六三、衛玄傳）といつて危惧

している背景には、文帝期に平靜を保った相州(魏郡)の地が、煬帝の即位にともなう混亂に乗じて動き始める可能性が存在していたことを示している。

- 0112 谷川道雄「均田制の理念と大土地所有」(東洋史研究第二五卷第四號) 参照。

- 0113 那波利貞「塲主放」(東亞人文學報二一四)、増淵龍夫著、中國古代の社會と國家』(弘文堂 一九六〇年) 一七一―四頁、川勝義雄「貴族制社會と孫吳政權下の江南」(『中國中世史研究』東海大學出版會 一九七〇年 所收) 参照。

- 0114 隋書卷七七、李士謙傳參照。以下李士謙に關しては同傳參照。
0115 『關東風俗傳』には、外戚・恩倖・豪族等による土地兼併の進行のなかで活動し續ける農民の姿が記されている(通典卷二、食貨二、田制下)。

- 0116 高敏氏前掲論文は、北齊から隋末に至る「山東」を、反亂の面からあとづけている。

- 0117 竇建德は一時里長を経験したことがあるが、このような里長的存在は北齊社會にあつて、門閥層の輕蔑の對象であつた(隋書卷七七、崔廓傳) ことから、鄉村社會總體の地位が向上したことを示唆しているだろう。

- 0118 谷川氏は前掲『隋唐帝國形成史論』で、北周―隋―唐と續く過程に「あらたな自由の形式を創り出していく」潮流をみているのであるが、隋末唐初の諸反亂における一つの意義は、この潮流をうけて「自由」の問題が民衆次元にまで擴大深化したところにあると措定できる。

- 0119 谷聲光著『府兵制度考釋』(上海 人民出版社 一九六二年)

一五六頁。

- 0120 二十五史補編所收の『唐折衝府考校補』に據つて、河北道折衝府の分布を示せば次表の如くなる。

州名	府數	計
懷州	8(2)	11(2)
魏相	1 2	
趙州	1	3
洺	1	
恆	1	
易州	9(9)	32(28)
幽	17(14)	
緜	1(2)	
平	1(1)	
檀	2	
薊	2(2)	
計	46(30)	

(内は新唐書地理志所載の折衝府數)

- 0120 隋の統計は、隋書地理志所載の戸數を唐の十道に照應させたが、各郡の配分において若干の差異がみられると思う。貞觀時の戸數は、日野開三郎氏の考證に従つた(『唐、貞觀十三年の戸口統計の地域的考察』東洋史學二四)。天寶時の戸數は、舊唐書地理志に據り、十三道を比較のために十道にまとめて提示した。

- 0121 E・G・ブリーイブランク「安祿山の叛亂の政治的背景」(上)(東洋學報三五・二)によれば、この現象の理由を武后朝頃から始まる北から南への流民移動に求めているが、貞觀期から江南方面の掌握に努めていることを考慮すれば、單に逃戸問題のみに限定できない。

- 0122 岡崎文夫著『支那史概説』(上)(弘文堂書房 一九三五年) 一八三―七頁、菊池英夫「唐折衝府の分布問題に關する一解釋」(東洋史研究第二七卷第二號) 參照。